

# 学生目線で糸口を 「サポーター」が研修



高齢者が住み慣れた地域で生活していく上で必要な支援を考える八戸市のワークショップ(WS)には、地元の大学生が「地域包括ケアシステム推進学生サポーター」として議論に参加している。学生目線で、住民にはない新たな意見を出してもらい、話し合いの場を活性化するのが狙い。

本年度は八戸学院大学で福祉を学ぶ17人がWSへの参加を予定しており、市はさらに議論を充実させよう

研修会で八戸市の高齢者施策を市職員から学ぶ学生たち

と5月中旬、同大学で3日間の研修会を開催。団塊世代が後期高齢者となる2025年が迫る中、介護や医療、生活支援などが一体的に提供される「地域包括ケアシステム」の構築が進められていることや、市の高齢者福祉施策、グループワークの手法などを学生たちに学んでもらった。

WS初参加の新堂洗佑さん(2年)は「地域の人が話しやすいような憩いの場をつくりたい」と意気込む。昨年度に引き続き参加する佐藤里奈さん(4年)は「研修会で学んだことを生かして、地域の課題を解決する糸口になるような提案ができれば」と話す。

学生を指導し、高齢者支援策を検討する市の「生活支援体制整備推進協議会」会長の小柳達也・同大講師は「学生が入ることで住民から前向きで建設的な意見が出て、議論が円滑に進む。学生の学びにもつながる『八戸モデル』として根拠を確立したい」と話している。

(新村菜穂)